相模経済新聞　2020年9月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

北里環境科学センター名誉顧問／宇宙生命哲学者 伊藤 俊洋

28

空気を胸いっぱい吸える幸せ

ヒトは、5分間空気を絶たれると絶命する。10日間水を飲まないと干上がる。20日間食べないと餓死する。人類が健康な生活を継続するためには、絶え間ない環境の保全が求められる。

今、世界はCOVID-19の脅威にさらされている。新型コロナウイルス（SARS-COV-2）は、半年余りの間に航空機で世界中に運ばれ、72億の人類は、その猛威の前で迷走している。人類が、ここまで大きな規模で、危機感を共有するパンデミックは、歴史上初めてのことである。

地球上に生命が誕生したのは、およそ38億年前であり、その最初の生命がどのような姿・形をしていたかは定かでない。様々な化学進化の段階を経て、最初に誕生した生命体は、さらに進化を続け、27億年前には、シアノバクテリアのような光合成能力を持った微生物だったと考えられる。光合成とは、葉緑体が光のエレルギーを使って、水分子を分解し酸素を発生させ、二酸化炭素を糖類などに変える反応である。生命が進化し、植物が、空気中に大量の酸素を蓄積したのち、地球上に動物が登場してきた。我々が生きてゆくために最も大切な酸素と食物は、基本的に植物によって作られている。

我々は、通常、地球上の平地であれば何処へ行っても、思う存分、胸いっぱいの空気を吸うことができる。この幸せは何物にも代えがたい。空気は、只（ただ）で、全ての生物に分け隔てなく解放されていて、好きなだけ呼吸することができる。しかし、どんなにきれいな空気があっても、COVID-19が、一旦重症化すると、酸素を取り込むことが困難になり、回復しても重篤な後遺症が残る。

コスタリカの熱帯雨林
（2009. 5. 10伊藤佑子撮影）

現代社会の大部分のエネルギーは、太古の植物から作られた化石燃料で支えられている。我々にとっては、化石燃料より桁違いに重要な酸素や食物も、全て植物の生命活動によって支えられている。これは、正に現在進行形で、我々は植物の庇護のもとに生活を送っていると考えられる。

地球環境を健全に保つ役割を担っている熱帯雨林が、経済効率最優先の政策によって急速に消滅してゆくのは、誠に由々しき現実である。我々は、日常の基本的な生活姿勢として、身の回りの森や林、里山、川辺や公園の緑、小さな植物群落にも、等しく愛情を注ぐべきではないかと思う。